

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2023年1月20日

羊羹の話

先日、羊羹（ようかん）のお裾分けをいただきました。ただの羊羹ではありません。高級老舗和菓子店「とらや」の羊羹です。さっそく校長室でお湯を沸かし、濃い緑茶を入れて、羊羹をいただきました。食レポすると「羊羹のもっちりした食感と上品な甘さが緑茶の渋みで引き立てられて、口の中が幸福感で満たされます。ああ、日本に生まれてきてよかったなあ、と感じるひとときです」という感じでしょうか。

現代では、スイーツと呼ばれるような甘いお菓子を、ケーキ屋さんや近所のスーパー、コンビニでも手軽に買うことができます。しかし砂糖が貴重だった時代、羊羹のような甘いお菓子はめったに口に入らない高級品でした。

古典落語に『代脈（だいみやく）』という噺があります。江戸時代、ある名医の弟子で、知恵はまわらないが食い気と色気は人一倍という少年「銀南（ぎんなん）」は、ある日ひょんなことから主人に代わって裕福な商家のお嬢さんを診察することとなります。「代脈」というのは「代理の診察」のことです。当時、医師の診察は、患者が医師宅へ来るのではなく、医師が患者の家におもむく往診が普通でした。初めての大病に張り切る銀南に、名医は往診の心得、挨拶から礼儀作法までを詳しく言い聞かせます。「まず、お手代（使用人）がお前を座敷に案内して、お茶と羊羹を出してくれる。だが、その羊羹は食べてはならぬ。こんなものは食べ飽きたというような顔をしなさい」と教える名医に、「羊羹を出されて食べられないなんて…そんな道理があるかい！馬鹿にするない！」とマジギレする銀南が可愛らしくて可笑しくて、何度聞いても思わず笑ってしまいます。

小説家の椎名誠さんのエッセイにも羊羹が登場する話があります。小説家であると同時に“タビビト”でもある椎名さんが、数週間、モンゴルの草原でヒツジ飼いの家族とともにテント生活を送ることになります。椎名さんは、常に手元に本がないといられない活字中毒なのですが、このときはうっかりと本を忘れてきてしまいます。活字に飢えた椎名さんは、荷物をあさり、何か“読めるもの”を探し、そのとき見つけたのが羊羹の包み紙でした。包み紙を熟読する椎名さんは、ふと羊羹の「羊」にも「羹」にも「ヒツジ」がいることに気づきます。なぜヨーカンにヒツジが？と不思議に思ったが、モンゴルの大草原の真ん中でその疑問を解決するすべはなかった、という話だったと記憶しています。

羊羹は小豆などを原料とする餡（あん）を寒天で固めて作ります。一見、ヒツジとは何の関係もありません。羊羹のなかにヒツジがいるのには、どんなわけがあるのでしょうか。

羊羹の「羹」は「あつもの」と訓読みします。「羹に懲りてなますを吹く」の「あつもの」ですね。羹は、古代中国のさまざまな食材を煮込んだスープで、羊羹はももとはヒツジ肉の煮込みスープのことでした。歴史書には、5世紀、南北朝時代の武人で料理が得

意だった毛脩之が北魏の捕虜となり、羊肉の羹を作って献上したところ、北魏の太武帝がたいそう喜んだ、という記事があります。

この料理が、鎌倉から室町時代ごろ中国に留学した禅僧によって日本に伝えられます。その際、肉食が禁じられている僧たちが、精進料理として羊肉の代わりに小豆や小麦粉などを用いたのが現在の羊羹の原型となったとされています。初期の羊羹は、お菓子というよりは、汁とともに具を食べる“料理”であったようです。やがて、汁と分かれて具が独立し、砂糖の入手が比較的容易になった江戸時代後期になって、寒天で固めた現在の羊羹に近いものが誕生したのです。

現在、羊羹は、JAXA（宇宙航空研究開発機構）によって“宇宙日本食”として認証されています。食べやすく、高カロリーで手軽にエネルギー補給ができる点、長期保存が可能など宇宙食としてすぐれているようです。宇宙空間に浮かんで、青く輝く地球を眺めながら食べる羊羹はどんな味がするのでしょうか。

今回、あれこれ調べてみて、羊羹が、ただ甘いだけの優男ではなく、歴史と信念を持ったなかなか骨のある奴だ、ということを知りました。

天命を知る

本の中には、一度読んでそれで終わってしまう本と、しばらく経ってからもう一度読み直したくなる本、そして、気がつくと数年おき、あるいは十数年おきに何度も手に取って読み返している本の3種類があるような気がします。井上靖の小説『孔子』は、自分にとって第3のカテゴリーに属します。この年末から年始にかけて、久しぶりで『孔子』を読みました。

『孔子』は、昭和62年から平成元年まで雑誌に連載された、井上氏最後の長編小説です。食道癌の手術を経た八十歳の井上氏は、八十二歳まで『孔子』の筆を執り、八十三歳で亡くなりました。氏の遺作といえると思います。

『孔子』は、少し変わった小説です。約2500年前の中国、戦乱の世を生き抜いた儒家の祖、孔子の生涯を、その末席の弟子「蔦薑（えんきょう）」が語るという形式で描いています。小説に登場する、孔子、その弟子の子路、子貢、顔回などは実在した歴史上の人物ですが、「ひねショウガ」を意味する名を持つ蔦薑は、作者が創造した架空の人物です。旅の途上にあつた孔子とその弟子たちの一団に雑用係として雇われ、そのまま、孔子の人徳に魅了されて弟子兼使用人のような立場で仕えることになる、という設定です。「（自分のことを）門下生だと申しましたら、子（注）は優しくお笑いになることでありましょうし、他の門下生たちは、多少、それは困るといった顔をなさることでありましょう」という蔦薑自身のことばが、その立場をよくあらわしています。

話は、孔子が没して30数年後、すでに老境にさしかかり、山村の陋屋（ろうおく）で隠者まがいの生活を送る蔦薑のもとに、孔子が生前に残したことばを収集し研究しようとする人々が、都会から訪れてくるところから始まります。彼らは生前の孔子について蔦薑に質問し、蔦薑がそれに答える形で物語が進行していきます。

現在、私たちは、孔子のことばや行いを『論語』をつうじて知ることができます。『論

語』は四書と呼ばれる儒教の基本テキストのひとつで、孔子の死後数十年の間に、孔子の弟子、または孫弟子（弟子の弟子）らによって編纂されたと考えられています。おそらく弟子たちは、自分の記憶している生前の孔子のことばや行いを持ち寄り、その意味するところを議論し、吟味しながら、言行録としてまとめあげていったのでしょう。小説『孔子』は、そんな時代を舞台としています。

小説の中で、蕪董や質問者たちは、孔子の残したさまざまなことばについて思いを巡らし、語り合います。その中に「天命」があります。

「五十にして天命を知る」は、論語に収められた孔子のことばの中でも、最もよく知られているもののひとつでしょう。高校の教科書にも取り上げられ、国語の教員として筆者もたびたび授業であつかいました。「我十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず」に続くこのことばを「十五歳で学問に志し、三十歳で独り立ちできるようになり、四十歳では迷いがなくなった孔子は、五十歳になると天が自分に与えた使命が何であるかを理解できるようになった、と言っています」と何の疑いもなく教えていました。

しかし、小説『孔子』は、このことばがもう一つ別の意味を持つ可能性を示唆しています。五十歳を過ぎた孔子は、弟子の子路、子貢、顔回、そして蕪董らをとめない、十四年にわたる中原放浪の旅に出ます。（蕪董の存在はフィクションですが、この旅自体は歴史上の事実です。）その目的は、優れた為政者と会い、政策を献上し、何百年も続く戦乱の世に幕を下ろし、戦いのない平和で穏やかな未来を実現することでした。紆余曲折を経て、孔子は最後に、南の大国、楚の昭王への謁見を目指します。

楚国内の負函（ふかん）の町に逗留し、昭王との謁見の機会を待っていた孔子一行に、ある夜、思ってもいなかった知らせが届きます。昭王が病に倒れ急死してしまうのです。昭王の死は、孔子の十四年にわたる旅の目的が、ついに果たされることなく潰（つい）えてしまったことを意味していました。孔子はその夜、暗い負函の夜空を見上げながら「帰らんか、帰らんか」と弟子たちに呼びかけます。それは、有力な為政者への献策をあきらめ、郷里に帰り、若者たちの教育に専念することを決意することばでした。

蕪董は、「五十にして天命を知る」を、中原放浪の旅から帰った孔子が、多事多難であった五十代の自分を振り返って口にしたことばでもあるのではないかと述べています。天からの聖なる使命を感じ、それを果たそうと努力したものの、ついにその志を果たすことはできなかった、これもまた自分の“天命”であるに違いない、という孔子の思いのこもったことばだ、と考えたのです。こうして見ると「五十にして天命を知る」には、いくつもの意味が多重層的に積み重なっているのかもしれない。

小説『孔子』には、読むたびに瞑目し、しばし思いに沈んでしまう箇所があります。

孔子の没後、蕪董が山深い村で小さな畑を耕す暮らしを得て、三十年の歳月が流れています。村には、年老いた蕪董を気遣い、何かと面倒をみてくれる一組の中年夫婦が住んでいます。夫婦に初めての女の子が授かり、女の子が一歳になると、母親は蕪董の身の回りの世話をするため訪れるにあたり、可愛らしい自慢の娘を連れて来るようになります。蕪董は一度娘を抱いてみたいと思いますが、彼女は母親の両腕の中から離れようとしません。ところが、二歳の誕生日の日、蕪董の許を訪れた娘は、どういうものか、花でも開くよう

に明るく笑い、蔦薑の方へ両手を差し出してきます。初めて幼い彼女を抱き、すぐに母親の許に帰した蔦薑は、この幼い者をこの世に他に較（くら）べるものがないほど美しく優しいと思うのです。

その夜、自宅に帰った娘は高熱を發します。熱が下がったときには手も足も動かない、目の焦点も定まらない状態となり、そのまま娘は亡くなってしまいます。蔦薑は、どのような天罰が、幼い、無垢な、初めて他人に好意を示した嬰兒に降ったのか、いかなる天命が幼い命を奪ったのかを、繰り返し繰り返し問うのです。小説をそのまま引用します。

「そして一ヵ月程、そのまま横たわっていたあと、幼い者は亡くなりました。併（しか）し、何事もなかったように、この山奥の村には朝が来、夕が来、夜が来ています。亡くなった幼女の父親も、母親も生きております。老いた私も亦、何変わりなく生きております。

併し、この天の下には何かがあったのです。美しく稚（おさな）いものは、花のように開き、笑い、身を乗り出し、——そして、それはそうしたことのために罰せられたのでありましょうか、病み、亡くなりました。

それから、いつか五年ほどの月日がめぐられました。

——命なるかな。

私は、年に何回か、深夜、天に向かって面を上げ、また下げ、命なるかな、そうした思いを抱いて、炉辺に坐っていることがあります」

孔子が「天命を知る」とした五十歳を、筆者はとうの昔に通り過ぎてしまいました。その日、その日、その時、その時の雑事にかまけて、「天命」などには思いもおよばない半生でした。そんな筆者を勇気づけてくれることばが『孔子』にはあります。余計な説明をせず、これも蔦薑のことばを引用します。

「私は子のたくさんのお詞の中で、一つを選ぶように言われた場合は、この“五十にして天命を知る”を採らせて頂くことでありましょう。凜々（りんりん）と、何か鳴っております。いつ口遊（くちずさ）んでも、凜々と鳴っているものがあります。

“天命を知る”——これはこれで、容易なことではなく、凡人のよくするところではありませんが、人間として生れ、正しく生きようとする以上、自分の仕事としては、天からの使命感を帯びているようなものを選びねばならぬでしょうし、また選びたいものがあります。

併し、そうしたことと同時に、天からの使命感を帯びているような仕事を選んだとしても、天からはいささかの支援もないかもしれません。——これはこれで、はっきりと肝に銘じて承知しておかねばならぬことでありましょう。

…中略…

併し、人間としてこのような立場に身を置くということは、めったに較べるものがない雄々しいことであるに違いありません。先きに述べましたように、天はどこかで嘉（よみ）して下さっていることでしょう。そうした天のお声が聞こえないだけ、そうした天のお姿が見えないだけのこと」

凡人である私たちには、自分にとっての天命が何であるかなどわかりようもない。また、天命にかなった行いをしたからといって、天が助けてくれるとは限らない。それでも、人が天命にそって生きようと懸命に努力するとき、天は「それでよい」と認めてくださる。

ほめてくださる。それで十分なのではないか。蔦薑じいさんの優しい声が聞こえてくるようです。

若い頃、何となく孔子や儒教に反感めいたものを持っていました。尊大で形式主義で、権力にすり寄り、人間本来の自由闊達な精神を制限するもの、というイメージがありました。そんなイメージが根底から覆ったのは、小説『孔子』に出会ってからです。人生の最晩年、作者、井上靖氏は、架空の弟子蔦薑に託して、人間への深い愛情と大きな信頼を貫いた孔子への敬愛の思いを形にしたかったのだと思います。小説『孔子』は、自分にとって、読むたびに、心の中に凜々と鳴るものを感じさせてくれる作品です。

注) 子…「し」。古代中国での成人男性に対する敬称。「先生」の意味。ここでは孔子を指す。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。